教育研究業績書

2025年05月07日

所属： 共通教育部　　資格： 教授　　氏名： 内田　正博

研究分野	研究内容のキーワード
世紀末ウィーン文化；　キャリア教育	ホーフマンスタール、ハプスブルク帝国、ヨーロッパ文化論、世紀転換期；　キャリア教育、アクティブラーニング、リーダーシップ 自己肯定感、自ら考え学ぶ力、失敗、行動力、相互作用、刺激、成長、夢と今
学位	最終学歴
文学修士,文学士	関西学院大学大学院 文学研究科 ドイツ文学専攻 博士課程 満退

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1.全学キャリア科目「卒業生が語る仕事と人生」（武庫川女子大学）	2014年09月22日～現在	社会の各分野で活躍する卒業生によるリレー講義。夢と情熱と誇りをもって真摯に仕事に取り組む先輩達からメッセージに刺激や励ましを受けた学生たちは、自らの今の学生生活を見直し、学習意欲の向上や生活習慣の刷新、さらに自分に不足する能力開発へと、自分自身の成長と自立を強く意識し、そのための行動を起こし始める。そして、学生たちは自分の可能性と自己効力感への気づきを得る。後半に約20分および質疑応答や毎回提出するA4サイズ1枚のコミュニケーションシート記入の時間も持つ。
2.キャリア教育科目（武庫川女子大学）複数	2012年4月1日～現在	①突然指名する2分間スピーチ、②数分のグループディスカッション、③A4サイズ1枚のコミュニケーションシートを埋まるように記述、④次回授業でのコミュニケーションシートの選抜紹介。これらを通して学生たちは、多様な意見をクラスのなかで分かち合い、学生同士の刺激によって、自己成長へのモチベーションを高める。「主体性、論理性、実行力」の向上とともに、組織の全構成員が持つべきものとしてのリーダーシップの育成をめざす。内田担当科目のほぼ全てに上述のアクティブラーニングを導入。「キャリアと学び」、「仕事力を考える」、「企業の見方」、「グローバル化とキャリア」、「就活を楽しむ」（短大対象）、「変化の時代に学ぶ」（大学・初年次ゼミ）
3.神戸大学国際文化学部新入生研修	2008年06月07日	神戸市セミナーハウスを会場として、新入生研修（オリエンテーション）の教員実行委員長を務めた際、学生実行委員会の協力を得ながら、初年次教育の一環としてのディベートを実施し、大学における学びを促進するとともに、国際文化学部での学生生活への導入を図った。
4.「職業と学び―キャリアデザインを考える」（神戸大学）	2006年10月01日から2012年03月31日	社会の各分野で活躍する神戸大学卒業生によるオムニバス講義。神戸大学初の全学共通キャリア科目を企画運営。一方的な講義にならぬよう、約20分の質疑応答の時間を設け、毎回A4サイズ1枚のコミュニケーションシート一面に感想や自分の意見を書かせるなど、学生の参加意識と能動的姿勢を求める工夫をした。
5.美術作品を通して戦争を考える	2006年04月01日から2012年03月31日	神戸大学国際文化学部のオムニバス授業である「異文化コミュニケーション概論」および「専門演習A」において、多文化共生や平和構築するためのは、それを阻害するものとして争いや戦争への理解が不可欠と考えた。その理解の手掛かりとして、戦争を描いた絵画を通して、背景となった時代と社会を探り、さらに戦争と人間を考えるきっかけを与えた。美術への関心を喚起するとともに、戦争を知らぬ学生たちにとってインパクトのある授業となった。
6.基礎ゼミ（神戸大学国際文化学部）	2005年04月01日から2011年09月30日	1年生前期の「基礎ゼミ」を担当し、学生に自分の研究テーマを選んで発表させ、学生同士の討論を促し、知的好奇心を喚起するとともに、質問力の向上と批判的

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
		思考力および自ら学ぶ力の育成に努めた。そのことによって、高校から大学への学びの転換を図る初年次教育を実効あるものとすることができた。
7.（参考）美術作品へのフィールドワーク	1993年04月01日から2006年03月31日	神戸大学国際文化学部11講座制時代のヨーロッパ文化論講座に所属当時、学生たちに本ものの美術作品に接する機会の提供することを企図して、年に数回、美術展鑑賞会を企画実施した。数多くの展覧会に学生を引率し、それまで美術作品に興味のなかった学生にも美術への関心を喚起することができた。また、基礎ゼミ担当の折にも自クラスの学生に同様の機会を設けた。
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.生涯学習鳴尾大学における講義（年１回担当）	2014年12月4日～現在	武庫川女子大学教員による高齢者市民を対象とするなるお会館主催のオムニバス講義。そのうち「キャリア教育」をテーマとして、年１回の講義を担当している。
2.甲南大学講義「国際理解Ⅱ」「グローバル化とキャリアデザイン」	2010年10月29日	2010年はグローバル化採用元年とも言われるが、日本人学生の内向き志向が問題となるなか、この年6月の楽天とユニクロの英語の社内公用語化のニュースは社会に大きな反響を呼んだ。国内市場の縮小にともない、もはや企業の業種や規模を問わず、海外での生産と販売は必須となっている。こうした産業構造の変化は、おのずと企業の採用活動にも大きな影響をもたらした。グローバル人材へのニーズが急速に高まったからである。
3.放送大学　卒業論文指導教員	2008年04月01日から2009年03月31日	放送大学から卒業論文指導教員を委嘱され、「社会と経済」専攻の社会人履修者の卒業論文の指導にあたった。テーマは「職業紹介業の利用による雇用について」。
4.神戸新聞文化センター三宮校ドイツ語講座講師	2008年01月01日から2013年03月31日	1982年から継続していた朝日カルチャーセンターのドイツ語講座を、朝日カルチャーセンター神戸教室の廃校に伴い、クラス維持を希望する受講生の求めにより神戸新聞文化センターに移行した。
5.神戸日独協会 文化講座「世紀末を生きた二人の女性の愛と人生」	2007年09月08日	一般市民や学生を対象とする講座において、オーストリア皇妃エリザベートとハプスブルク帝国の伯爵家に嫁いだ青山光子について、異文化理解（衝突）の視点から紹介した。
6.国際シンポジウム「芸術都市ウィーンの魅力を探る」	2006年09月14日	神戸国際芸術祭2006「ウィーンの情熱」が13日から3日間にわたってあじさいホール（ホテル舞子ビラ内）で開催されたが、その関連特別プログラムとして、演奏者をパネリストとするシンポジウムが実施されたが、その司会を務めた。神戸大学大学院国際文化学研究科異文化研究交流センター主催。
7.放送大学面接授業（集中講義）　「ヨーロッパ世紀末文化論」	2005年10月15日から2005年10月16日	放送大学兵庫学習センターにおいて、2日間の集中講義のかたちで、放送大学の履修者である一般市民を対象に、映像資料を交えながら、ウィーン世紀末文化を中心とする19世紀後半のヨーロッパの文化と社会に関する講義を行った。
8.コンサートプレトーク（講演）「逆説としての世紀末ウィーン」	2003年07月26日	美術展「クリムト1900年ウィーンの女神展」の開催中、兵庫県立美術館ギャラリーにおいて、「ウィーンからの音を聴く～クリムト展によせて」というコンサートが開かれたが、その直前に世紀末ウィーンの社会と文化を理解するための講演を行った。主催は兵庫県立美術館。
9.西宮市生涯学習大学「宮水学園」講師	2002年11月20日及び2003年03月18日	国際文化コース講師として、2002年は「世紀末を生きた二人の女性―エリザベートとミツコ」について、2003年には「世界を魅了した日本の美―ジャポニスム」について講義した。
10.朝日カルチャーセンター神戸教室ドイツ語講座講師	1982年04月01日から2007年	朝日カルチャーセンター神戸教室において、一般市民

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
	12月31日	を対象として、年度によって異なるが、初級ドイツ語や中級ドイツ語を教えた。授業の合間に、ドイツ語の歌をうたったりビデオ鑑賞を行い、ドイツ語やドイツ文化に興味をもつように工夫した。
4 その他		
1.神戸大学 高大連携講義「戦争と多文化共生―美術を通して考える」	2011年08月05日	神戸大学における授業を高校生に紹介し体験してもらう高大連携講義の枠内で、人文科学系の授業の一つとして、国際文化学部で実際に行っている講義を紹介した。
2.奈良県立郡山高校模擬講義「美術を通して考える戦争と多文化共生」	2009年06月09日	合同大学説明会において、神戸大学国際文化学部から派遣され、高校生を対象に大学で行われる授業「美術を通して考える戦争と多文化共生」を紹介した。
3.奈良県立郡山高校キャリア教育講演会「大学における学びとキャリアデザイン」	2008年09月24日	大学入学がゴールではなく、その後の大学生活の過ごし方が大切との視点に立って、神戸大学の紹介とキャリア支援の考え方を紹介した。対象は高校1年生。
4.（注）学生・保護者対象のキャリアガイダンス等（神戸大学）	2007年04月01日から2012年03月31日	（参考）以上記した事項のうち、行事等は学外機関主催のものであるが、神戸大学の行事としては、キャリアセンター主催のキャリアガイダンスや育友会（保護者会）等において、学生および保護者向けに、それぞれ毎年複数回の講演を担当した。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.兵庫県立大学経営学部　　ＦＤ講演会「キャリア教育とは何か―その目指すものと必要性について」	2010年12月08日	文部科学省や関係者の間ではもはや自明となっているキャリア教育であるが、すべての大学教員を見渡した場合、その重要性が必ずしも充分に認識されているとはいえない。おそらくそうした問題意識からと思われるが、教員対象にキャリア教育について啓発的な講演を依頼され、キャリア概念と現在の学生の意識を踏まえて、キャリア教育の意義と必要性について論じた。
2.日本国際文化学会第5回全国大会フォーラム「国際文化専攻大学院生の就職事情」口頭報告「国際文化系修士の就職支援に向けて―神戸大学国際文化学部の事例」	2006年07月15日	前年の学会フォーラムでは、国際文化学部生の就職支援を取り上げたが、この学会では国際文化系院生の就職問題を考えるフォーラムを設定し、パネルディスカッションのかたちで、相互の情報と意見交換を行った。当時は各大学とも院生の就職支援は手探りの状態で、神戸大学国際文化系大学院（当時は総合人間科学研究科）の報告も、すでに顕著な成果を収めていた学部の就職支援を、修士院生にも援用可能な参考事例として紹介した。
3.日本国際文化学会第4回全国大会 フォーラムⅡ「国際文化学部の就職支援」（パネルディスカッション）のコーディネーター・司会および口頭報告「社会が求める国際文化学部生」	2005年07月02日	専ら研究成果を発表する学会が、学生の就職支援に関する問題を取り上げることはきわめて稀であるが、まだ歴史が浅く、その多様な研究分野と教養的性格の濃い国際文化学部はその多くが、学生の就職に不安と危機感を抱いており、学会でフォーラムのかたちで就職支援問題を取り上げることになった。その際、就職支援に顕著な成果を上げている神戸大学の国際文化学部にコーディネート役が回ってきたものである。神戸大学は「社会が求める国際文化学部生」というテーマで報告した。会場は法政大学市ヶ谷キャンパス。
4.日経人事採用担当者セミナー「新卒採用の諸問題を問う」第3部パネルディスカッション	2004年08月27日	企業の人事担当者を対象とするセミナーの第3部パネルディスカッションにおいて、独法化したばかりの国立大学の就職支援について報告した。当時神戸大学にはキャリアセンターは存在せず、国際文化学部エクステンションセンター委員長として出演した。他のパネリストは、私学からは明治大学就職事務部長堀川英昭

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
		氏、企業からは富士通およびセブンイレブン・ジャパンの人事担当者。会場は東京イイノホール、主催は日本経済新聞社広告局他。
5.第3回キャリア研究の集い第1分科会口頭報告「神戸大学の就職支援の現状と課題」	2003年10月25日	大会テーマは「生涯を通じたキャリア形成支援―その実践と課題」。「学校教育におけるキャリア教育の実践と課題」をテーマとする第1分科会で、当時発足して間もないとはいえ、徐々に成果をあげつつあった神戸大学のネットワーク型就職支援を紹介した。殆どの大学に見られる中央管理のピラミッド型の就職支援体制ではなく、各学部就職委員会、各学部同窓会、大学生協、学生団体などの個々の支援組織が自発的に活動しながらも、情報の共有を含めて連携協力する神戸大学の支援システムを評価した他大学の関係者の推薦によって発表が実現した。会場は日本体育大学世田谷キャンパス、主催はキャリア研究会、共催は日本進路指導学会関東地区部会。
6.第9回国立大学新構想学部教育研究フォーラム 口頭報告「神戸大学国際文化学部の就職支援」	2003年09月25日	主として教養部改組によって発足した全国の国立大学新構想学部の情報交換を行うフォーラムにおいて、第9回の「就職対策の現状と展望」というテーマのもとで、神戸大学国際文化学部から取組みを報告した。会場は佐賀市のはがくれ荘、担当は佐賀大学。
7.京都産業大学文化学部ＦＤ講演会「神戸大学国際文化学部の就職支援」	2002年03月11日	ほぼ同様の性格をもつ学部が学部単位で就職支援に成果を上げていることに注目した京都産業大学文化学部教授会から講演を依頼され、神戸大学国際文化学部の就職支援について理念や活動状況を紹介した。
4 その他		
1.大学コンソーシアムひょうご神戸 第6回ＦＤ・ＳＤセミナー「グローバル化 する世界における大学の役割」テーマ別分科会テーマ②「激変する就職 環境とキャリア支援」 講演「キャリア支援における不易と流行」	2011年09月16日	「激変する就職環境とキャリア支援」の分科会テーマの下で、「これからのキャリア形成思考―想定外を生き抜くために」と題する講演を行った森隆史氏とともに、「キャリア支援における不易と流行」について発表した。この場合の「流行」とは、昨年から2011年にかけて、文字通り激変した複数の要因からなる就職環境を意味する。それは、(1)グローバル化、(2)社会的・職業的自立に関する指導等の法令化、(3)教育情報公表の義務化、(4)経団連の提言、(5)オンライン企業説明会、(6)就職情報ナビ方式の限界露呈、などである。他方、「不易」とは、就職活動以前の学生生活の充実、すなわち「ステップ・ゼロ」を大切にすること、言い換えれば教養とコミュニケーションを核として自己を成長させることである。主会場は神戸大学百年記念館六甲ホール。ただし分科会テーマ②の会場は、神戸大学瀧川記念学術交流会館。
2.日本キャリア開発協会(JCDA)関西支部会講演「神戸大学におけるキャリア形成支援とキャリアカウンセラーに望むこと」	2010年10月13日	ＣＤＡ有資格者を対象とするイベントにおいて、神戸大学におけるキャリア教育とネットワーク型キャリア支援の状況とその背後にある理念等を紹介し、併せてキャリアカウンセリングの重要性とキャリアカウンセラーへの要望を話した。会場は神戸大学百年記念館六甲ホール。
3.九州地区私立大学入試・広報連絡協議会 キャリア教育講演会（高校教員対象）「大学までの人、大学からの人―大学におけるキャリア教育」（沖縄会場）	2010年07月09日	大学のキャリア教育の意義や必要性について論じ、「大学までの人」に終わらず「大学からの人」となるよう学生の成長と自立を支援することこそが重要と訴えた。会場はパシフィックホテル沖縄。
4.九州地区私立大学入試・広報連絡協議会キャリア教育講演会（高校教員対象）「大学までの人、大学からの人」（福岡会場）	2010年05月11日	大学受験合格を最終目標とするのではなく、なりたい自分や人生の夢に向かって学生生活を充実させることこそ、最も重要であることを念頭におきながら、高校、大学を問わず、教員が若者の教育にあたることが求められると訴えた。会場は福岡国際会議場。
5.広島大学キャリアセンター10周年記念式典パネルディスカッション「これからの大学のキャリア支援とキャリア教育のあり方について」口頭報告「神戸	2008年02月08日	全国の国立大学に先駆けて「学生就職センター」を設置、その後法人化に際して現在の名称に改称した広島大学キャリアセンターが創設10周年を迎えたのを機

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
大学のキャリア支援とキャリア教育の現状と課題」		に、10周年記念式典を開催したが、そのプログラムの一つであるパネルディスカッションにパネリストとして招かれ、報告と意見交換を行った。他のパネリストは、京都大学キャリアサポート鱸淳一センター長、立命館大学キャリアセンター平井英嗣部長。フロアとの質疑応答も活発に行われた。
6.神戸大学キャリアセンター　センター長	2007年06月01日から2012年03月31日	キャリアセンター設置にともない、初代のセンター長に就任。以後2回再任。キャリアセンターは、2002年後半に誕生したネットワーク型就職支援体制の継続・拡充を図り、学内各支援組織をつなぐハブ組織としての役割を担うとともに、他方、年々変化する学生の状況を見据えつつ、他組織と連携協力してＰＤＣＡを実践しながら、つねに学生にとって必要と思われるキャリア教育やキャリア就職ガイダンスを企画実施し、併せて就職相談の充実にも注力している。キャリアセンターは、学内の数多くの就職支援組織が各々のニーズに則して独自に企画する行事開催等の活動に対して情報の集約と発信を行い、神戸大学におけるキャリア支援ネットワークの活性化に努めた。
7.神戸市「神戸ワークネットワーク」就業促進協議会委員	2006年06月14日から2012年03月31日	神戸市域の就業環境の改善と向上をめざして、神戸市が中心となり、兵庫県、ハローワーク（国）、経済団体、大学、NPO等が連携協力しながら、情報と意見交換を行う協議会の委員を務めており、人材を育成し社会に送り出す大学の立場から発言を行うとともに、協議会の事業に協力している。
8.神戸大学国際文化学部キャリアデザインセンター委員長	1998年04月01日から2012年09月30日	国際文化学部旧エクステンションセンター（現キャリアデザインセンター）の3代目委員長に就任、その後10年以上にわたって委員長を務め、その間、国際文化学部の就職支援とその支援システムの構築に尽力した。今では就職支援と教育の充実が密接にリンクしていることは当然とされるようになってるが、国際文化学部においては、すでに2000年以前からそのことを重視し、指導教員が学生の進路把握を行い、その情報をエクステンションセンター（現キャリアデザインセンター）が集約し、毎月の教授会において講座ごとの内定先一覧を報告するというやり方を定着させた。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1.『ドイツ短編小説の変容―掌編小説の諸相』	共	1984年5月	クヴェレ会	クヴェレ研究叢書６．深見茂他20名と共同執筆「シュニッツラーの『レデゴンダの日記』」(pp.88-102)を担当。この小説は作者47歳のとき、ハプスブルク帝国解体を数年後に控えた1911年に発表された。19世紀末のウィーンを舞台に、夢と現実が交錯し相互に浸透し合う謎にみちた記述を分析し、その甘美な夢想と無残な現実の極端なまでの落差、さらにその語りの錯乱から、当時の帝都ウィーンの華麗な文化的繁栄とその裏に潜む崩壊の危機を仄かにあぶり出す作品として、その文学史的意義について考察した。
2.『ドイツ短編小説の展開― 世紀転換期から第二次大戦末まで』	共	1980年1月	クヴェレ会	ドイツ文学研究叢書４．平田達治他25名共同執筆。「ベルゲングリューン『三羽の鷹』」(pp.399-414)を担当。1936年にカトリック作家のヴェルナー・ベルゲングリューンが発表した作品を紹介するとともに、中世を舞台にした保守的な装いに包まれたこの小説が、非人間的な暴虐が支配するナチス政権下のドイツにおいて、一見そうした政治的な現実とは無縁に見えながらも、じつは密かに、人間と文化を守る「永遠の秩序」の存在を訴えようとしていることを明らかにした。
2 学位論文				
1.修士論文「ホーフマンスタールの初期作	単	1974年	関西学院大学文学研究科	19世紀末ウィーンの詩人フーゴー・フォン・ホーフマンスタールの小説や戯曲など初期作品を分析し、その特質を考察した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2 学位論文				
品について」				
3 学術論文				
1.ホーフマンスタールとオーストリア ―ハプスブルク神話の歴史的意味について	単	2000年04月	『ＫＧゲルマニスティク』第5号（下程息教授退任記念号）関西学院大学文学部　pp.19-38	『昨日の世界』のなかで作家シュテファン・ツヴァイクは、当時すでにこの世に存在せず、自らの生まれ育った崩壊前のハプスブルク帝国を「安定の黄金時代」と呼び、ハプスブルク帝国讃美を高らかに謳い上げた。また、ホーフマンスタールも、帝国解体後にオーストリアへのオマージュを表明し、オーストリアとヨーロッパの親縁性を語った。クリムトやマーラー、シュニッツラーやフロイトなど、芸術・学術のあらゆる分野にわたって百花繚乱の豊饒な世紀末文化を生み出す土壌となった帝都ウィーンとともに、こうしたハプスブルク神話は今なお一般に広く浸透しているといってよい。だが、『オーストリア文学とハプスブルク神話』の著者クラウディオ・マグリスは、このようなハプスブルク帝国の美化を、現実の悲惨から目をそむけようとするオーストリア特有の一つの心的メカニズムとして批判する。そうした批判はたしかに当を得ているといえるが、他方、ハプスブルク帝国讃美当時のの歴史的状況のなかで考えると、帝国の衰退とヨーロッパ精神の崩壊のなかでかろうじて自らのアイデンティティを保とうとする悲痛な声のようなものだったという見方もできる。
2.ホーフマンスタールとオーストリア ―ハプスブルク神話の歴史的意味について	単	2000年04月	『ＫＧゲルマニスティク』第5号（下程息教授退任記念号）関西学院大学文学部　pp.19-38	『昨日の世界』のなかで作家シュテファン・ツヴァイクは、当時すでにこの世に存在せず、自らの生まれ育った崩壊前のハプスブルク帝国を「安定の黄金時代」と呼び、ハプスブルク帝国讃美を高らかに謳い上げた。また、ホーフマンスタールも、帝国解体後にオーストリアへのオマージュを表明し、オーストリアとヨーロッパの親縁性を語った。クリムトやマーラー、シュニッツラーやフロイトなど、芸術・学術のあらゆる分野にわたって百花繚乱の豊饒な世紀末文化を生み出す土壌となった帝都ウィーンとともに、こうしたハプスブルク神話は今なお一般に広く浸透しているといってよい。だが、『オーストリア文学とハプスブルク神話』の著者クラウディオ・マグリスは、このようなハプスブルク帝国の美化を、現実の悲惨から目をそむけようとするオーストリア特有の一つの心的メカニズムとして批判する。そうした批判はたしかに当を得ているといえるが、他方、ハプスブルク帝国讃美当時のの歴史的状況のなかで考えれば、帝国の衰退とヨーロッパ精神の崩壊のなかでかろうじて自らのアイデンティティを保とうとする悲痛な声のようなものだったという見方もできるだろう。
3.事物への回帰―ホーフマンスタールの『チャンドス卿の手紙』	単	1996年06月	『ドイツ文学語学研究』第36号(荒木泰教授退職記念論集）関西学院大学文学部pp.105-120	1902年に発表された『チャンドス卿の手紙』は、ホーフマンスタールの散文作品のなかで最も有名であり、それだけでなく、20世紀前半のドイツ文学史において、言語危機あるいは言語懐疑を端的に示す記念碑的作品と見なされている。この作品の舞台設定は、17世紀初頭のイギリス。手紙の書き手であるチャンドス卿が突然言葉を失い、言葉に対する不審を覚えたことを訴える。読者の多くは、そこに以前は音楽性豊かな美しい詩句を泉のごとく生み出したが、いまや20代後半となってかつてのような甘美な抒情詩を書かなくなった作者ホーフマンスタール自身と重ね合わせる。しかし、仔細に観察すれば、作品に書かれているのは、単にネガティブな言語不審だけではない。むしろ後半は、新しい世界を発見したことへの喜び、言い換えれば、ささやかな事物を含めて現実の世界が自分の前に立ち現われる喜びを伝えようとしているのである。このときも、彼は前半とはまったく異なる意味で言葉を失っている。いまや彼は、言葉によって世界を支配する存在ではない。自らの夢想が紡ぎ出す美的な言葉に酔いしれるのではなく、世界の事物自身が語る言葉に耳を傾けようとしているのである。
4.「非生」のドイツ―ホーフマンスタールの『帰国者の手紙』	単	1995年12月	『ドイツ文学論攷』第37号 阪神ドイツ文学会　pp.53-70	作者33歳、1907年に書かれた『帰国者の手紙』が設定した時代背景は、1901年。この時期に、18年ぶりに故国ドイツに帰郷したある人物の手紙というかたちをとったこの作品は、それまでのホーフマンスタールには珍しくほぼ同時代を扱っている。それだけに、より直接的に社会に向けて発信しようという意欲を持ち始めたといってよい。帰国者は、普仏戦争に勝利しドイツ帝国成立後の経済的繁栄

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				を謳歌するドイツとドイツ人に接して、すべてがばらばらに分裂していることに大きな違和感と失望を覚える。いまやドイツを支配するのは「非生」「非存在」というべきものであり、それは換言すれば「全体の欠如」であり、「生の敬虔」の欠如にほかならない。こうしたドイツの生の充実を欠いた現実に対して、後半の手紙では、ゴッホの作品に接して、あふれんばかりの生の充溢を表現する記述で埋められる。それはここでもまた、前半の陰画的世界が陽画に転じる初期ホーフマンスタールの基本的な構図を想起させるのである。
5.世紀末ウィーン文化とハプスブルク帝国	単	1994年11月	『ドイツ文学論集』第23号　神戸大学ドイツ語教室 pp.93-111	19世紀後半から世紀転換期にかけて、多民族国家ハプスブルク帝国の首都ウィーンで開花した世紀末ウィーン文化の概観とその文化史的意義について論述した。父親の世代の文化的価値に異を唱えて、息子たちの世代が「若きウィーン」を標榜し、文学、絵画、音楽、建築等あらゆる分野で革新的な創造活動を展開していった。その際、当時のユダヤ人たちの存在も世紀末ウィーン文化大きく貢献したことにも言及した。
6.元帥夫人の時―ホーフマンスタールの『薔薇の騎士』	単	1993年11月	『ドイツ文学論集』第22号　神戸大学ドイツ語教室 pp.1-22	R.シュトラウスの名作として知られるオペラの台本『薔薇の騎士』（1911年）は、戯曲としてみてもじつに素晴らしい作品である。この作品では、ある意味で「時間」が大きなテーマになっており、作中には様々な種類の「時間」が流れている。そして何よりもその中心を占めるのは、元帥夫人の「定められた時」である。「何事にもそれにふさわしい時やきまりというものがあるのだから」という言葉が元帥夫人の口から語られるが、この言葉が聖書の「コヘレトの言葉」（伝道の書）の言葉に由来することを指摘した。併せて、この華麗なオペラ初演の数年後にハプスブルク帝国が崩壊の時を迎えることを想起し、この作品が、豊饒多彩な文化を生み出した世紀末ウィーンにとって、一つの白鳥の歌であったことを指摘した。
7.エレクトラからアリアドネへ―ホーフマンスタール『ナクソス島のアリアドネ』	単	1992年10月	『ドイツ文学論集』第21号　神戸大学ドイツ語教室 pp.107-128	ホーフマンスタールのエレクトラは「誠実」に固執し、「変身」を拒否する存在であったため、彼女には死しか残されていなかった。しかし、作者自身は、この誠実と変身のパラドックスのなかで、死よりも生を、硬直よりも変身を志向してゆく。R.シュトラウス作曲のオペラ台本『ナクソス島のアリアドネ』（1916年）において、作者は、誠実（硬直）と変身の間で揺れ動く主人公のアリアドネに、変身、すなわち生を受入れさせようとするのである。とはいえ、変身もまた両義的である。変身しながら不実を重ねるツェルビネッタの存在がそのことを示している。このようにきわめて精妙なアイロニーに彩られたこの『ナクソス島のアリアドネ』は、その軽妙な外貌とは裏腹に、緻密な計算とともにホーフマンスタール自身の切実な実存的問題を秘めており、その多義性ゆえにいかにもホーフマンスタールらしい作品なのである。
8.エレクトラの闇―ホーフマンスタールの悲劇について	単	1991年10月	『ドイツ文学論集』第20号　神戸大学ドイツ語教室 pp.89-106	「ソポクレス劇の自由な翻案による一幕物悲劇」と銘打たれたホーフマンスタールの『エレクトラ』（1901-3年）は、ホーフマンスタールの戯曲としてより、むしろR.シュトラウスのオペラとしてよく知られている。しかし、まさしく世紀転換期に書かれたこの作品は、作者自身の個人的な転機とも重なり合い、1902年に発表された言語危機を表明した作品として知られる『チャンドス卿の手紙』の時期とかさなっている。主人公のエレクトラは誠実さに固執し変身を拒否するあまり、自由に生きることができない。その結果、彼女は生より死を選びとる。作品に潜む法外な闇と閉塞感と死のモチーフの充満は、ホーフマンスタールの死と再生の切望の表れであり、自らの美的世界に硬直の危機を覚え、エレクトラに死を与えた作者自身はその後、「社会的なもの」の獲得へと歩み始めるのである。
9.ホーフマンスタールの詩『雲』を読む	単	1990年11月	『ドイツ文学論集』第19号　神戸大学ドイツ語教室 pp.129-155	詩『問い』の場合もそうであったが、ホーフマンスタールの詩『雲』の解釈の可能性の広がりに論者自身が驚嘆しつつ、この詩をあらゆる角度から読みとろうとした。一つの可能性は、まずはこの雲とは自我が沈黙し非人称的主体と化した詩的主体という解釈である。しかし、最終的に行きついた解釈の地点は、このじつにさりげない抽象的な詩における「雲」とは言葉を意味するのではないかと

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				いうことだった。言葉への強い関心、それと表裏一体の言葉への懐疑、いずれもホーフマンスタールにとってきわめて重要なテーマであり、じじつ、このテーマは後年、時代を画する不朽の名作『チャンドス卿の手紙』として結実するのである。
10.眼差と言葉―ホーフマンスタールの『問い』をめぐって	単	1989年11月	『ドイツ文学論集』第18号　神戸大学ドイツ語教室 pp.1-32	処女作にはすでに作者の特質が含まれているとはよく言われることである。ホーフマンスタールの処女作は『昨日』（1891年）とされるのが普通だが、しかし、厳密にいえば、作者16歳のときに書かれた詩『問い』（1890年）が処女作である。この作品自体、あまり研究対象には値しないと考えられているようだが、仔細に見ると充分考察に値すると思われたことから、あえて解釈の対象として取り上げた。この詩のモノローグの相手は一見恋人のようだが、見方を変えれば、その相手はもしかするともう一人の自分、しかもそれは、詩人としての自分ではないかという解釈を提示した。ならば、詩の最後で、言語懐疑が述べられるのも理解できるのである。
11.ロリスの抒情詩	単	1988年10月	『ドイツ文学論集』第17号　神戸大学ドイツ語教室 pp.25-57	1890年、ホーフマンスタール16歳のとき、ロリスの名で『問い』という詩を発表した。筆名を用いたのは、当時高校生には公の文筆活動が許されていなかったからである。すでにここには言葉に対する懐疑が表明されている。本論では、当時人気のあったといわれる流行詩人デールマンの、ありとあらゆる世紀末の道具立てで身を包み、いかにも時代の流行に合致した詩『わたしの愛するもの』と比較しながら、『問い』を含むホーフマンスタール初期の詩『僕の庭』、『思念跳梁』等について論究し、それらの初期の詩を通して、時代の流行を追うだけに留まらないホーフマンスタールの、永続的な価値を有する不易流行の世界を明らかにした。
12.ホーフマンスタールにおける逆転の構図―『バソンピエール元帥の体験』について	単	1982年12月	『クヴェレ』第35号 クヴェレ会 pp.33-45	「逆転の構図」とは、作品前半にはナルシシズムに浸された甘美な陶酔の支配する世界が、後半には、グロテスクで暗鬱な世界へと移行する、言い換えれば、美から醜へ、夢想から現実へ、光から闇へ、すなわち陽画から陰画へと反転することを意味し、こうした反転こそが、初期ホーフマンスタールの作品を特徴づける構図といえる。本論で扱う『バソンピエール元帥の体験』（1900年）は、この構図を最も顕著に示す作品である。主人公がこよなく甘美な一夜を共にした女が翌日にはペストで死んでおり、主人公の快楽を追い求めるナルシシズムは無残にも打ち砕かれる。作者は、ゲーテの作品をその豊かな想像力によって脚色したように見えるが、じつはホーフマンスタールの確固たる逆転の構図のなかに、ゲーテの作品の織り込んだのだと指摘した。
13.ドッペルゲンガーと死―ホーフマンスタール『騎兵物語』について	単	1982年10月	『ドイツ文学論集』第11号　神戸大学ドイツ語教室 pp.17-44	ホーフマンスタールの作品は概して、不思議な魅力を湛えながらも、その意味は容易に理解しがたいものが多い。その最たるものの一つが、本論で取り上げた『騎兵物語』(1899年)である。ここでも主人公のレルヒ曹長は不可解な死を遂げる。上官に射殺される前に彼の身に起こったこと、それは女との出会いの後の過度の夢想とその後の「死の前兆」としてのドッペルゲンガーとの出会いである。こうした物語の成り行きをきめ細やかに分析すれば、当初不可解に見えたこの作品も、ホーフマンスタール初期短編小説の一連の作品群と同じ構造をもつことが明らかとなった。
14.『第672夜の物語』覚書（三）	単	1982年02月	『研究論叢』第15号 親和女子大学 pp.75-91	本論では、主人公が醜悪で無残な死を迎えるまでの、何から何まで彼の思うようにならない街中での出来事を詳細に分析し、とりわけ物語前半では甘美な思いを喚起するものとしての死に対して、後半では逆に不安と恐怖を覚えさせるものとしての現実の死の登場に注目した。そして、ホーフマンスタールにおける死の意味を考察するとともに、この作品がホーフマンスタールの全作品のなかでもきわめて重要な意義をもつことを指摘した。
15.『第672夜の物語』覚書（二）	単	1981年02月	『研究論叢』第14号親和女子大学 pp.73-94	『第672夜の物語』はきわめて精密に構成されているが、大きく分ければ3部からなると考えることができる。それは、（１）主人公の邸宅、（２）山中の別荘、（３）街中の場面、であるが、本論では、商人の息子のナルシシズムが徐々に崩壊に向かい始める山中の別荘のシーンの前後と不気味な少女と遭遇する温室の場面の分析と解釈を行った。
16.『第672夜の物語』覚		1980年02月	『研究論叢』第13	『第672夜の物語』の作品解釈の骨格は、すでに上記3. で示した通

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
書（一）			号 親和女子大学 pp.1-24	りだが、短編ながらこの作品の素晴らしさは、網の目のように様々なモチーフや伏線が複雑に織り込まれ、各部分が精密に関係づけられており、細部にわたる分析を行っても、多義的なこの作品の魅力が尽きることがないことである。本論では、世紀末ウィーンにおける文学状況とホーフマンスタールの関係、さらに志願して兵役を体験しながらも兵役の地ゲーディングの耽美的な帝都ウィーンとのあまり違いに決定的なカルチャーショックを受けたという作者自身の自伝的要素、そして作品については、物語の前半部、召使に囲まれた富裕な商人の息子の美的な生活を詳細に分析した。
17.死の童話	単	1980年01月	『クヴェレ』第32号クヴェレ会pp. 53-64	ホーフマンスタールの『第672夜の物語』の作品自体の分析や解釈は、「ホーフマンスタール『第672夜の物語』」他の論文で示したが、本論では、ホーフマンスタールにおける死のモチーフの重要性と、併せて、作者が童話という形式を選んだことに注目し、世紀末文化にしばしば見られる生と死のモチーフと関連させながら、世紀末ウィーンにおける精神状況を読み取ろうとした。
18.ホーフマンスタール『第672夜の物語』	単	1979年03月	『独逸文学研究』第20輯　関西学院大学独文科　pp. 51-73	1895年に21歳のホーフマンスタールが書いた不可思議な雰囲気と謎に満ちた短編小説の解釈に挑戦した意欲的な論文。作品タイトルの一部に「物語」の訳語を用いているが、原語は「童話」である。しかしながら、童話の衣装をまとっているが、この作品もやはり光と影が交錯し、崩壊寸前ながら豊饒な文化を生み出した世紀末のウィーンとハプスブルク帝国の精神状況が色濃く反映している。ナルシシズムに彩られた人口楽園のごとき邸宅に住む一人の美しい商人の息子が、ふとしたことから外出し薄汚い街中を放浪するはめにより、やがてナルシシズムが無残にも打ち砕かれ、ついに作品の結末では、醜悪な顔つきとなって不条理な死を迎えるという、およそ童話らしくないストーリーだが、本論では、創作動機として若いホーフマンスタールの苦悩を読みとりつつ、作者個人の精神的危機が時代の運命と符合することを指摘し、この作品の重要性と意義を明らかにした。
19.ホーフマンスタール『昨日』	単	1978年03月	『研究論叢』第11号 親和女子大学 pp.25-52	1891年、17歳のホーフマンスタールが初めて書いた戯曲『昨日』の分析と解釈に取り組んだが、その結果、論者のなかで若いホーフマンスタールの多義的な光芒を放つ輝きと魅力がいっそう増すことになった。「昨日は偽り、今日だけが真実だ。そのつど瞬間に身をゆだねよ」と言い放つ主人公アンドレア。この台詞には、19世紀末ヨーロッパのニヒリズムの立ち込める精神状況の反映が窺えるが、こうした快楽主義的かつ悪魔主義的な主人公の主張が、瞬間に身を委ねてしまった恋人の不実を目の当たりにして、もろくも崩れてしまう。そうした主人公の形姿と台詞の詳細な分析を通して、華麗な耽美主義の衣装の背後に潜む作者ホーフマンスタールとその作品における倫理的な志向を明らかにした。
20.ホーフマンスタール『痴人と死』	単	1974年03月	『独逸文学研究』第16輯　関西学院大学独文科　pp. 17-44	早熟の天才と謳われ、19世紀末のウィーンを代表する詩人、戯曲家、エッセイストであるフーゴー・フォン・ホーフマンスタール(1874-1929)の初期を飾る作品の一つ、一幕物の抒情劇『痴人と死』を、テキストの精読と精密な分析を通して、独自の解釈を明らかにした。作者19歳、1893年に書かれたこの作品は、すでにきわめて成熟した作風を示しており、読者によって、様々な姿を見せる多面体といってよい。通常、唯美主義な側面が強調される詩人だが、他方、きわめて倫理的な側面も併せ待っており、初期ホーフマンスタールを代表する『痴人と死』もその例に漏れない。本論では、唯美的な生き方を貫く主人公の「痴人」よりも、むしろ真摯な生を指し示す「死」に重点があることを指摘した。
その他				
1．学会ゲストスピーカー				
2．学会発表				
1.（口頭発表）「ホーフマンスタールとオーストリア」	単	1999年	第167回阪神ドイツ文学会研究発表会	中期以降のホーフマンスタールのオーストリア観、とくにヨーロッパ文化崩壊の危機感を抱いた第一次大戦後のオーストリア観について発表した。この時期、ホーフマンスタールはヨーロッパおよびオーストリア文化の擁護に積極的に発言・行動してゆく。ザルツブ

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				ルク音楽祭の創設に深く関わったのもそうした姿勢の一つだったのである。
2.（口頭発表）「事物への移行―『チャンドス卿の手紙』」	単	1996年01月	第156回阪神ドイツ文学会研究発表会　シンポジウム「トーマス・マンと20世紀文学の das Erzaehlen（語り）」	トーマス・マン中心として、20世紀ドイツ文学の語り（語り方）の変容と多様性を考えるシンポジウムにおいて、パネリストとして、言語危機、すなわち語りの不可能性を告白する20世世紀冒頭に生まれた『チャンドス卿の手紙』について発表した。その成果は、上記学術論文の「事物への回帰―ホーフマンスタールの『チャンドス卿の手紙』」である。
3.（口頭発表）ホーフマンスタールと「若きウィーン」	単	1988年06月	第127回阪神ドイツ文学会研究発表会　シンポジウム「世紀転換期ウィーンの文学と芸術	世紀末ウィーン文化を多面的に考察するシンポジウムで、パネリストとして、主に初期ホーフマンスタールの詩の紹介と解釈を発表した。その成果は、上記学術論文の「ロリスの抒情詩」である。
4.（口頭発表）ホーフマンスタールの短編『騎兵物語』について	単	1980年01月	第94回阪神ドイツ文学会研究発表会	ホーフマンスタール初期の短編小説の一つ『騎兵物語』について発表。その成果は、上記学術論文の「ドッペルゲンガーと死―　ホーフマンスタール『騎兵物語』について」 である。
３．総説				
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1.「コミュニケーション力と『真摯・自由・ 協同の実践』」（メッセージ）	単	2011年06月	『就職活動スタート』神戸大学キャリアセンター発行　p.2	主として学部3年生・修士1年生向けに作成された神戸大学の就職支援の概要を示すリーフレットのなかの一文。就職活動に不可欠な面接で見られるもの、それは学生の思考力、感性、価値観、笑顔などの表情、そしてとくに広い意味でのコミュニケーション力である。「真摯・自由・協同」とは神戸大学のモットーであるが、これを実践できるということが、社会人として仕事ができることを意味しており、ひいてはその実践こそが就職活動の成果につながることを説いている。
2.「就職活動にあたって ― 未来の自分をめざして」　（メッセージ）	単	2010年10月	『就職ガイドブック』神戸大学キャリアセンター発行（2012年卒業・修了予定者用） p.2	後期に入り、これから本格化する就職活動に取り組む学部3年生・修士1年生に向けて、就職活動について留意すべき心構えについて書いたもの。学生と社会人の違い、就職活動にはなぜ面接があるのか、仕事のできる社会人、コンピテンシーや社会人基礎力、社会的関心と自立、質問力、自分探しより自分創り、適切な情報収集などについて説明している。
3.（依頼記事）「ネットワーク型のキャリア支援」	単	2010年04月	『職業研究』（雇用問題研究会）2010年春季号 p.22	全国の大学の就職・キャリア支援を紹介する連載記事「キャリアセンター通信」において、神戸大学の活動状況と今後の課題等を紹介した。例えば、2009年11月にはその一カ月だけで計36回のキャリア・就職行事を開催しているが、それも、キャリアセンターだけでなく、学内の多様な支援組織が各々独自の活動を展開しつつ、補完性の原理にしたがい、情報共有や告知協力など相互の連携を図るネットワーク型キャリア支援を展開しているからである。
4.「神戸大学キャリアセンターってどんなとこ？」（取材記事　上記タイトルは記者による）	単	2009年05月	『ＫＴＣ』社団法人神戸大学工学振興会（工学部同窓会）No.68（特集・変貌する神戸大学）pp.5-9	教育の成果としての卒業生の存在は、学生におけるキャリア形成の自覚と就業意識の醸成にとって、きわめて重要である。卒業生と同窓会はキャリア教育やキャリア支援にとって不可欠なヒューマンリソースと考える神戸大学キャリアセンターとしては、工学部同窓会機関誌から取材の依頼があったとき、これに喜んで応じた。キャリアの概念、卒業生講師による全学キャリア科目、キャリアセンターの活動、ネットワーク型キャリア支援などを説明し、併せて卒業生に対して、いっそうの連携を訴えた。
5.「神戸スタイルの就職支援―ユニークなネットワーク型」（p.5）　「人生と仕事―全学キャリア科目がめざすもの」	単	2008年10月	『KOBEuniversity STYLE』神戸大学広報室 Vol.10（特集・神戸大学のキャリア教育）	神戸大学の全国的にも例のないユニークなネットワーク型キャリア支援の成立事情を紹介した。国立大学に共通する弱みから始まったキャリア支援であったが、逆に強みに転化する可能性を秘めていることにも言及した。　後者の「仕事と人生」では、キャリアセンター設置以前の2006年から開講していた全学キャリア科目「職業と学び―キャリアデザインを考える」の理念と授業内容などを紹介し

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
(PP.11-12)				た。　なお、この大学広報誌はホームページ上でも閲覧可能。http://www.kobe-u.ac.jp/info/magazine/style/10/all.pdf
6.「キャリアセンター、スタート！」	単	2007年10月	『KOBE university STYLE』神戸大学広報室　Vol.8 p.2	2007年6月1日、神戸大学にキャリアセンターが設置されたが、その機会に、キャリアセンターの使命、役割、課題等について書いたものである。すなわち、支援理念の確立、支援対象の拡大、支援プログラムの拡充、卒業生との連携、ネットワーク型支援体制の強化、広報の重要性などである。
7.「初の全学共通キャリア科目を終えて」	単	2007年04月	『KOBEuniversitySTYLE』神戸大学広報室　Vol.7 p.14	神戸大学の全学共通教育における本格的なキャリア科目の開講は、キャリアセンター設置の前年、2006年度から始まった。制度上（時間割表）の科目名は単に「総合科目Ⅱ」であるが、その趣旨と内容は明らかにキャリア教育を意味するものであった。授業方法は、社会の各分野で活躍する神戸大学の卒業生によるリレー講義。対象は1年生。学生たちは先輩たちの語る多様な仕事の現場経験に熱心に耳を傾けながら、自分たちの将来に思いを馳せ、それと同時に、今の自分と生活を振り返り、これから何をなすべきかについて考える貴重な機会ともなった。この短文は、そのような全学キャリア科目「職業と学び―キャリアデザインを考える」初年度のドキュメントの一つである。
8.（報告）「神戸大学の就職支援について」	単	2004年09月	『大学と学生』日本学生支援機構通巻480号（特集・就職） pp.40-46	国立大学が法人化し、その就職支援がどのように変化するか、社会から注目されていたが、神戸大学も法人化にともない、全学的な就職支援が課題として意識されるようになり、2004年に「就職支援室」が設置された。当時、キャリアセンターはまだ存在していなかったが、神戸大学では、各学部、各同窓会、大学生協、学生団体他が独自に活発な就職支援活動を展開しており、しかもそれらの各組織が相互補完の関係において、情報共有や告知協力のかたちで連携しながら、ネットワーク型支援体制を構築していた。拙文では、こうした神戸大学のユニークな就職支援体制を説明し、併せて後半では、国立大学の一学部としてはすでに顕著な成果を収めていた国際文化学部の、教員によるきめこまやかな就職支援のあり方を紹介した。
9.（提言）「出口から見た大学教育」	単	2001年01月	『The Kurihe(クーリエ)』神戸大学大学教育研究センターニュース 第15号　pp.5-7	国際文化学部のエクステンションセンター（就職委員会；現キャリアデザインセンター）委員長を務めてしばらくして書いた文章。時代背景としては、バブル崩壊後の混迷をきわめる日本において、社会が求める人材像も大きく変化し、それまでのように金太郎飴や指示待ち人間はいらないと言われ、変革を担える人材が強く求められるようになった時代で、私立大学の一部が「就職部」を「キャリアセンター」に改称するなど、大学における就職支援も大きな転換期を迎えた頃であった。拙文では、就職支援が教育とリンクしていることに気づき、就職活動の成否が、大学での学び、とりわけ演習形式の授業で考えることやコミュニケーション力をしっかり身につけたかどうかにかかっていることを指摘し、入学直後の1年生のときから演習形式の授業の必要性を訴えた。
10.（コラム）アルマ・マーラー；酒田健一訳『グスタフ・マーラー 回想と手紙』白水社 1973年	単	1990年	『基礎ドイツ語』7号　三修社　p.61	19世紀から20世紀の世紀転換期を代表する作曲家グスタフ・マーラーの妻アルマが、回想と手紙によって夫マーラーを描写した文献の紹介。マーラー自身とともに彼が生きた世紀末ウィーンの社会と文化を知るうえでも興味深い。併せて夫婦の関係についても言及しており、その点に焦点を当てて読むこともできる。ドイツ語学習者向けの雑誌から、ドイツ語圏の社会・文化に関する本の紹介を依頼されて寄稿した小文。
11.（翻訳）エミール・シュタイガー著『フリードリ・シラー』	共	1990年	白水社	ドイツ古典主義文学の碩学シュタイガーによるシラー論の名著を、神代尚志他11名の神戸大学ドイツ語教室の教員有志と共訳。「拒まれているもの」(pp.103-111)と「理念」(pp.164-184)を担当した。
12.（事典項目）コンラート・フェルディナント・マイヤー	単	1986年01月	『世界歴史大辞典』全22巻　教育出版センター　第18巻　p.118	19世紀のスイスの作家、詩人コンラート・フェルディナント・マイヤー(1825-98)は、若いころ厳格な母のもとで抑圧された生活を送っていたが、母の死が契機となって自己を取り戻し、その後イタリア旅行やドイツ帝国成立等の影響を受け、多くのすぐれた歴史小説を書いた。
13.（事典項目）フー	単	1986年01月	『世界歴史大辞	A.シュニッツラーとともに、世紀末ウィーンを代表する詩人フー

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
ゴー・フォン・ホーフマンスタール			典』全22巻　教育出版センター　第18巻　p.53	ゴー・フォン・ホーフマンスタール(1874-1929)の略歴と創作について記述した。16歳から創作活動を開始し、早熟の天才と謳われ、数々の抒情詩や詩劇や評論を書いたが、その後、言語懐疑の深刻な危機を体験しながらも、ヨーロッパ文化の保存と再生をめざして、社会性や共同体の理念を盛り込んだ戯曲や評論を数多く書いた。
14.（評論）音の変容	単	1978年12月	『クヴェレ』第31号　クヴェレ会 pp.65-73	ゲオルク・ショルティ指揮、シカゴ交響楽団のコンサートでグスタフ・マーラーの交響曲第5番の生演奏を聴いて大きな衝撃を受けたが、それは、それ以前に同じ曲と演奏をレコードで聴いたときの印象は全く異なっていた。レコードでは到底味わえなかったコンサートにおける圧倒的な感動はどこからきたのか、その理由を探ろうとしたのが小論執筆の動機である。コンサートで受けとめたものは、ユダヤ人である作曲家マーラーの傑作に対する、同じくユダヤ人である指揮者ショルティの渾身の力をこめた演奏であった。マーラー論であると同時に、演奏を聴くという行為について考察したエッセイである。
６．研究費の取得状況				
1.（報告文）メロドラマとは何か―変容し続ける大衆劇	共	2004年	『メロドラマ的思考形式と19世紀ヨーロッパの音楽劇』 科研成果報告書 pp.57-66	フランスを中心展開した大衆劇のジャンルであるメロドラマの分析を通して、19世紀ヨーロッパの社会と時代を考察した。

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
1.2005年04月01日から2013年03月31日	日本国際文化学会
2.2005年04月01日～現在	日本キャリアデザイン学会
3.1982年04月01日から2013年03月31日	オーストリア文学会
4.1975年04月01日から2013年04月31日	阪神ドイツ文学会
5.1975年04月01日から2013年03月31日	日本独文学会